九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（二）：十一月二～二十日

静永，健
九州大学大学院人文科学研究院 ： 教授

稲森，雅子
九州大学大学院人文科学研究院文学部門

https://doi.org/10.15017/4772789

出版情報：文學研究. 119, pp.1-43, 2022-03-14. Faculty of Humanities, Kyushu University
バージョン：
権利関係：

目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（二）

――十一月二～二十日

静永　健
稲森雅子

はじめに

目加田誠博士（一九〇四～九四、以下敬称略）は、一九三三年七月に九州帝国大学助教授となり、同年十月より約一年半北京に留学した。その後も第二次世界大戦終結までの間、一九三六、四二年の二度中国を旅した。これらの旅行日記が、福岡県の大野城心のふるさと館に保管されている[1]。昨年、目加田家ご遺族及び同館にご了解のもと日記の翻字を開始することとなった。あらためてここに深謝いたします。

一九三六年十月二十七日、目加田誠は、再び北京をめざして福岡を出発した。下関から釜山へ渡り、大連、奉天、新京、朝陽、承徳に立ち寄った。本稿は、奉天から新京に戻った翌日より北京滞在期前半までの記録である。新京では、旧交を温める一方、羅振玉宅を訪問するなど充実した日々を過ごした。一旦奉天に戻り、朝陽を経由して承徳に至る。承徳では、避暑山荘（熱河離宮）やラマ寺院などを見学した。承徳―北京間は鉄道が未開通の時期で、

バスに揺られて長城を越えた。北京に到着するや、友人知人たちと再会を果たし、銭稲孫宅に用意されていた部屋に逗留しながら、新築の東方文化事業総委員会書庫に通い、周作人の紹介で趙蔭棠宅を訪れるなどした。

【凡例】

・漢字は現在の常用漢字体に改め、仮名づかいは原文のままとした。
・人名の「澤」「瀧」などはそのままとし、満洲は「満洲」に統一した。
・句読点記号や書名の『』記号などは適宜補った。
・空郭箇所は「□」とし、その他の記号はノートの記載に拠る。
・閲覧資料の筆写部分は、適宜文献を参照し、異同箇所に点線を付して〔　〕内に参照文献の内容を記した。
・注釈文中、目加田誠を「筆者」と称する。
・注釈中の年代記載は基本的に西暦を用い、適宜元号を付した。
・九州大学中国文学会編『目加田誠「北平日記」――一九三〇年代北京の学術交流』（中国書店、二〇一九年）及び拙稿「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）」（『中国文学論集』第四十九号、九州大学中国文学会、二〇二〇年十二月、一八〇～二〇六頁）に注釈がある場合は、「『北平日記』●頁注●」、「『北京旅行日記（一）』●頁注●」と表記した。
・目加田誠が旅行中に入手した資料が大野城心のふるさと館に現存する場合は、注釈内にその旨を記す。

十一月二日

山本君と中根を訪ひ[2]、直ちに文教部に至り、文化協会杉村勇造氏[3]にあひ、協会の事業を問ふ。北京にて知り合ひた

る山田文英君は考古学方面の整理を此地に於てなし、現に輯安の古跡の遺品の陳列をなしつゝあり。[4]
江幡[5]の室、編審室を訪ひ、中小学教科書の編纂をきく。教科書は已に完成せり。国策を織りこみたる編纂、ことに日本歴史、満州国史の編纂は甚だ興味あり。江幡の態度に敬服す。興味を引きたるもの二三貫ふ（日本語ハ中学初級以下ハ標音仮名を用ふ）。
協会に関しては水野梅暁氏の書物をもらふ。[6]
江幡、山本両君と百貨店三中井にて中食。[7]之より羅振玉を訪ふ。杉村氏已に座に在り。羅振玉は案に違ひて誠になごやかなる老人なり。銅器二三、顧炎武の書冊を見る（完本に近き『清朝実録』をこゝにて見る）。令息は日本語を解す。[8]
こゝを辞して中根にゆき、北京にて世話になりたる頃の話に花咲き、五十ちゃんも可愛ゆき娘になりて、いろいろ語る。
夜、松浦氏[9]宅にて晩餐。山本夫婦、江幡、中根小母さん、曽恪氏夫婦[10]座にあり。
恰も防空演習、灯火を暗くして一種特別なる気持ちなり。[11]
この夜、江幡宅に泊る。江幡と語りて深更に及ぶ。満洲国の種々の方針など江幡よりきかされ、誠に得る処多く、楽しかりき。この感想こゝに急に記すあたはず。後、暇を得て述ぶ可し。
（満州皇帝の詔勅「朕日本天皇陛下とその精神一体の如し」の解釈を問ひ、始めて了解するところあり。王道々々の声、昨年来消え、鄭孝胥又引退す。すべての鍵こゝにあり。[12]）
東洋文化の指導者となる可き日本人の態度につき江幡と語り合ひしこと忘れず。[13]
我、この度の旅行、学問の路にふみまよひ、思想に行きづまり、生活に虚無を感じ、而も焦燥の中に新に起き上らんとするもその方向を知らず、せめて、と思ひ立ちたる旅なりしが、奉天を経、この地に来て、次第に目覚む

るものあり。旅行の空しからざりし事、已に今知るを得たり。

十一月三日

午前中、江幡宅にて端書など書き、ひる前山本宅に至る。早き中食。松浦、中根に挨拶し、本屋により、新京駅よりあじやにのる。[14]

駅頭、山本君と別れんとして、ふと涙出でたり。

この殺風景にして、而も新興の気の渦巻く中に心を充す仕事もなく、若き夫婦して泌々生活する山本君夫婦のいぢらしさに心打たれたるならん。夫人は極めて朗らかに美しき人なり。

今日の中に錦州まで行かんとして、やゝ疲れを覚え、且つ車中よみたる水野氏の書に動かさるゝところあり。今一度奉天の博物館を見んとして、今夜奉天に泊る。宿は前日の丸中ホテル、室は山本君の泊りし部屋。[15]湯に入り、早く寝る。

十一月四日

午前中、再び博物館を訪ね、銅器の類を見る。刻糸の展覧已に了りて、絵画の陳列あり。王翬の扇面、文徴明の扇面、金冬心の「写生花果図」、史可法の書、祝枝山、唐寅（修篁書屋図）の絵等あり。[16]

銅版数点、之ハ熱河のものかと思ひしに違ひたり。承徳の総務庁経理課長阿部国太郎氏に館内にてあふ。河瀬氏より承徳教育局に紹介をもらふ。[17]

中山氏を尋ね、トランクをうけとり、中山氏に見送られて奉山線にのる。

錦県にて陽已に沈む。朝陽ゆきの汽車に直ちにのりかへしに、車内二等車は我一人のみ。食堂もなく、蠅多し。[18]錦

県を出でゝ間もなく夜に入る。寂寥、車輪の音のみ。

（以上車中にて）

午後九時四十分、朝陽につく。第一ホテル[19]の提灯をもちたるボーイに荷物をたのみ、馬車にのる。馬車屋とボーイと争ひさわぎ、心苦しかりき。

駅前を出て、半里ばかり広き野をゆく。彼方の街らしきものの上に、赤き片割れ月上る。頭上には星斗爛きたり。薄明りに高き塔浮び出づ。三座塔の一なる可し[20]。塔の下を通り街に入る。門を閉し切ったる街は深夜の如し。県公署の前の第一ホテルといふは以前は何なりしか、全くの田舎宿なり。興味つきざるもやゝ心細し。

晩き食事をすませて十一時床に入る。

十一月五日

朝早く起き、朝陽街を歩く。誠に落ちつきて、気持よき町也。有名なる三座塔は今二基のみ残る。北方の（？）塔は仏像の浮彫、折からの朝日に映えて限りなく美しかりき。佑順寺なるラマ寺を見る。大蔵経にて有名なるもの也[21]。古玩店を見しも何もなし。

午前十時二十分の汽車にて承徳に向ふ。凌源をすぎ平泉[22]に至る頃、車外の風景全く異り来る。殆ど峡谷也。而も切り立ったる岩山のみ。樹木ハ一本もなし。その間に羊豚の遊びを見る。

鉄路の附近の村ハ、鉄路愛護村となりて、互に連絡して土匪の来るに備ふと云ふ[23]。車中、満鉄その他の旅行団多し。

午後七時十分、承徳につく。ステーションホテルに泊らんとして満員。春日ホテルの客引きに無理にすゝめられて来て見れば全く日本式の宿也。而も宿料甚だ廉ならず[24]。止むを得ずこゝに泊る。

駅よりこゝに至る道、まっくらなる畑の中らしく、橋を渡りて街に入りても更に暗し。

十一月六日

昨夜、雨の音をきく。起きて見るに今にも降りさうなる天気也。その中を顧問部に千葉一郎大尉を訪ね、離宮その他に交渉してもらひ、自働車を出してもらふ。[25] 話の中に暴風雨となる。教育庁に至る頃止む。先づ教育庁（省公署の内）にゆき、日田視学官[26]に逢ひ、社教部にて保管する西蔵文（蒙文ハ少し）大蔵経を見る。すべて千百冊あり。[27]

之より文廟[28]にゆき、尊経閣を見る。尊経閣は今図書館となり殿版の書多し。

乾隆二年校刊楮紙文献通考
倣宋周易王注（乾四六）
篆文六経四書
康熙字典　など美しきもの也。

その他『涑水伝家集』、用宣王刻石鼓文乾隆庚戌搨本等あり。他に乾隆帝『棉華図』など。[29]

【欄外注】熱河省立承徳女子師範学校々長兼任省立承徳図書館長　夏玉清
承徳県模範学校日語教員　張哲生[30]

一旦宿に帰り中食。午後自働車の迎へを待って再び教育庁にゆき、日田視学官と同乗、離宮にゆく。初め、離宮の一部を占むる軍部（旧戯台のあるところ）[31]の鈴木部隊副官、陸軍少佐中山孝一氏にあひ、離宮内自働車通行の許可を得。氏は河村又介氏と同窓なりと。[32]

万寿園（ママ）、熱河泉、紀恩堂等をまわる。風景、奈良の公園に似たり。加ふに鹿の遊べるまで全く相似たるは面白し。

旧宮殿に入り、芝居の行頭を見る。衣装を詰めたる箱数十あり。楠木殿の古雅愛す可し。[33] 之より博物館に入る。有名なる周銅器十個は実に素晴らしきもの也。郎世寧の画けるといふ銅版図数十葉あり。乾隆御筆熱河文廟の記その他見る可きものあり。多くは七宝のラマ塔也。[34]

【欄外注】銅器ニツキテハ別記。

離宮を出てラマ寺見物にゆく。先づ大仏寺に至る。次いで遠き殊像寺（乾隆帝を文殊に擬せし問題の像あり）、布達拉寺、行宮寺を見る。布達拉は西蔵式の建築、その雄大なる壮観、実にお伽噺の御殿か、アラビヤンナイトに出づる宮殿か、夢の国とも云ふ可し。たゞ今は荒廃甚だし。保存法講ぜられつゝあり。といふも余りに大建築大規模にして困難なる事情多かる可し。行宮寺の本殿は金瓦尚燦爛たり。[35]

乾隆帝の雄志大略に驚かざるを得ず。外民族の懐柔に宗教文化を以てせる偉大なる力を見る。

午後四時すぎ見物を了る。千葉大尉が自働車を借し与へられたる好意によりて、かく短時間に多くの見学をなし得たり。

特に午後はやゝ風出で、雲晴れて、紺碧の空麗しく、ラマ廟の景色一層美しさを増したりき。

夜暗き町に散歩に出でしも、日本カフェーの跋扈甚しく、浅間しく、又一種異様なる感じを持ちたりき。[36]

十一月七日

午前七時半すぎ、奉天バスにて古北口へゆく。[37] 途中峻嶺を越え谷間を渡り、険阻なる路をゆくも、我軍の努力による道路、実に見事に完成し、さして危険苦痛を覚えず。[38] 景色の美しさ云はん方なし。

十一時、古北口につく。バスの継間を利用し、その辺りを見物。長城は山の嶺より嶺にはひめぐり、望楼聳え、岩山高く蒼空にあざやかなる線を画きて紫に冴えたり。[39]

十二時半、承平バスにて北平に下る。南天門[40]を通り、此度の道路の困難なる事、古北口に至る迄と全く相反せり。道にして道に非ず。水の流るゝ川も、礫の層のつき出たる岩山も、たゞまっしぐらに揺れにゆれ、もみにもんで走る。幾度か座席にとび上り、頭をうつ。

密雲[41]に到着せし時は殆ど人心地なき程なり。密雲よりは平野なり。この頃より陽は已に西に傾き、やがて紅く野の彼方に落つ。時に一度は橋の崩れしまゝなる川を渡らんとして遂に進退不能に陥り、とかく工夫の末、半時間以上を費して遂に通過する等、その困難一方ならず。

かくて日全く暮れて、北平安定門に入る。この時の感慨形容しがたし。[42]躍る胸ををさへて両側を見るも只暗き灯のつゞくのみ。しばらくは何もわからず、やがて中央近くかゝり、東四牌楼の灯の賑ひを横に見て、崇文門街を東単牌楼に来り、胡同を入りて、元坂田組あたりの終点につく。[43]

布施君[44]迎へに来る。自働車にのり、山室君[45]が待ち居る由なる故、一緒に鹿鳴春[46]にゆきて、酒をのみ食事し、やゝ人心地出でたり。山室君に伴はれて、この夜一声館[47]に泊る。大塚正雄君[48]部屋に来る。七年前、余が始めて支那に来れる時、知りたる男也。当時は可愛ゆき少年なりしも今は立派なる青年也。

十一月八日

朝の中、文化事業にゆく。小竹君と話す中、正午になり、中食をよばる。橋川氏は夫人病気入院中にて留守[49]。午後、小竹夫婦、山室君と北海にゆく。画舫斎に入り、北海の北岸を歩き、漪瀾堂に茶を喫す。[50]それより小竹、山室両君と銭稲孫氏を訪ふ。銭氏の宅に已に余の室を設けあり。[51]明日或ハ明後日より世話になる事となす。

西単牌楼の西湖食堂にて晩食。中原公司にて銅元袋をかひ、[52]東安市場にゆく。本屋にて

徐霞客遊記の原刊本

篋子入り同文版二十四史　を見る
まだ初めなる由、自重して、たゞ見るのみに止む。[53]
両君に分れて、一声館に帰る。

十一月九日
朝、文化事業にゆき、橋川氏と語る。
四庫提要の事、丁香結の事。[54]
段玉裁の手紙、宋翔鳳の書等見せて貰ふ。何れも垂涎をく能はず。[55]
文化事業にて大槻氏等も共に中食。[56]
午後、山室君の科学図書館を参観。山室君の苦闘驚く可く、又涙ぐまし。[57]
小竹氏に案内され、夕方まで東方図書館の書物を見る。『毛稚黄十二種』[58]はじめ、余にとりても珍らしく、嬉しきもの多し。今後、閲覧の了解を得をく。此の『宣和遺事』[59]は全く稀本なりと思へり。[60]
山室君方々に電話をかけ、松井秀吉、八木香一郎、真武君、布施君、山室君と東安市場東来順にて晩食。[61]大いに気焔上る。この人々を伴ひて一声館に帰り、又十二時すぐる頃まで語る。

十一月十日
午前中、小学校の大塚氏達に挨拶にゆく。倶楽部に在りときゝ、倶楽部を訪ね、森、坪川君達にもあふ。[62]同学会に常氏を尋ねしも、けふ来らず。[63]
東安市場にゆき

中州音韻（北大影印）
漢魏六朝韻譜
紅楼夢抉微（闕鐸）
故宮博物院十一週年紀念文献論叢[64]

等をかふ。外新聞各種。

午になり、俄国料理にゆき中食をすます。この頃より猛然なる風吹き出て、砂埃の為め半丁先は見えず、且つ何となく風邪心地、そのまゝ俥に乗りて一声館に帰り、床をしきてねる。床の中で新聞をよむに、各種書物の廉売など目につく。

郁達夫は日本にゆきし様なり。[65] 北海に仏学図書館の計画など見ゆ。

買ひ来りし書物をよむ。闕鐸の書は可成り面白し。

『文献論叢』にある「四庫提要中の周亮工」といふ論文[66]ハ先日より四庫提要を明にせんとせし折なれば、大いに役立ちたり。

午後、風邪の気味にて臥床。

十一月十一日

午後、扶桑館に京城大学森谷氏[67]をとふ。銭宅へ越す。何もかも一年半の前に同じ。只室は令嬢の繡房になりし為め、甚だ美しくなりたり。茶器など、元のまゝ也。様々の事を想ひて淋しくなる。夜、西単商場に買ひ物にゆく（支那靴。墨盒など）。[68]

十一月十二日

清華同学会[69]を訪ふ。山室君と布施君とロシヤアパートにて中食。午後、琉璃廠へゆく。徳友堂にて

　頼古堂文集

をかふ。[70]来薫にて

　重刻四庫全書弁正通俗文字

　東都事略

　文淵楼叢書

などかふ。[71]

硯屋にすばらしき硯あり。八十元といふ。買へず。

商務印書館にて新刊書若干をかふ。

夜、両氏と華楽に尚小雲の「雷峯塔」を見る。[72]以前と演出ことなりしも、後半に至りて実に好し。

十一月十三日

朝宅にありて、陽向に出でゝ読書、来薫主人来ル。

午後、隆福寺にゆく。帯経堂、文奎堂にゆく。[73]

文奎堂にて『頼古堂尺牘』、『返生香』をかふ。[74]

文化事業小竹氏を訪ひ、食事。

西四牌楼の華賓園にて入浴して帰る。[75]

十一月十四日

今年の秋は実に風烈しく埃立ちて、堪へられず。

午後、周作人氏を訪ひ、趙蔭棠氏に紹介をたのむ。按院胡同に常氏を訪ひしも転宅。

夕方、周豊一君来る。周作人氏の『風雨談』をくれる。[76]

銭氏一家と晩食を共にす。

十一月十五日

夜半より雪ふる。

午前、山室君来る。銭氏に案内され三人、同和居にて食事。[77]

雪景色を見んとて景山にのぼる。日本人多勢にあふ。

銭氏先に帰り、山室君と東安市場にゆき、法商学院の寸氏にあひ、[78]布施君を訪ね、一緒に食事。それより映画を飛仙戯院に見る。[79]

蔣介石五十誕辰記念飛行器献納式、及童子軍検閲のニュース、及十五年革命の武漢を背景としたる戦士といふ映画。[80]ニュースは甚だ見る可きも、戦士は全く駄作。何ら時代の空気を伝へえず。山室、布施君に送られ馬車にて帰る。

十一月十六日

徳友堂の『校礼堂全集』、『陳本礼四種』

文奎の『説文長箋』、皆よきもの。[81]学校にて買ひたし。

午前、竹田氏を訪ふ。主人るす。夫人と語る。[82]
三条胡同に常氏を訪ひて又あはず。
五昌にて金百円をかへる。九十六元也。
潤明にて食事。[83]東安市場に古玩店にてきのふ見た硯を買ふ（帰宅後見るに余りよからず）。
大倉の前をとほりかゝり、家彝を見んとて寄る。久しぶりにあひ、懐しげ也。
（東安市場にて『国防文学論戦』をかふ。[84]）
夜、周豊一来ル。
共に二条胡同、ロシヤ料理にゆく。

十一月十七日
午前中より文化事業にゆき『続修四庫全書提要』[85]を見る。
抜萃[86]
説文古語攷　清〔国朝〕傅雲龍　字懋元
説文経典字釈一巻　光緒癸未重刻本　清〔国朝〕高翔麟撰　（内有与戈順卿商榷増益十余義）
説文通訓定声補遺一巻　朱氏群書〔斎刊〕本　朱駿声
魯詩故
斉詩伝　娜嬛館補校本　馬国翰輯
韓詩故
説文理董後編六巻　盆山図書館石印　呉穎芳撰

説文徐氏新補新附攷証一巻　銭大昭（積学斎叢書）

詩経音韻図五巻　清　甄士林撰

薛君韓詩章句二巻　玉函山房本

漢薛漢撰。清馬国翰輯、後漢書儒林伝称、漢世習韓詩。父子以章句著名。漢少傅父業、又称杜撫受業於薛漢、定韓詩章句、是章句称薛君者、撫所題也。国翰輯是書序云、薛漢父方字子容、附見漢書鮑宣伝、又唐宰相世系表云、薛夫子名方、字夫子、広徳曽孫。案漢書鮑宣伝、言王莽時清名之士、斉則薛方子容、拠唐書世系表、漢父名方丘、字夫子、初不名方、則薛方子容、自別是一人、且世謂章句為漢撰、亦尚有疑。後漢書馮衍伝、章懐太子注薛夫子韓詩章句曰、詩人言雎鳩貞絜、以声相求、必於河之洲云々、因知章句為方丘撰、非漢撰也。明帝紀引此仍作薛君韓詩章句者、蓋薛君即謂薛夫子耳。正如三家詩遺説考、成於陳喬樅、実本其父寿祺。故張之洞書目答問、遂以此書属寿祺。所謂薛夫子韓詩章句、殆亦猶是歟。

説文双声二巻　説文疊韻三〔二〕巻　読書札〔劄〕記

○四音定切四巻　劉熙載撰

×古韻大指一巻

四声均和表五巻　清　洪榜撰（本戴東原之説）

○顔氏家訓校記　郝懿行撰　擺印本

顔氏家訓注七巻

清　趙曦明注　盧文弨補注

曦明初名大潤、後易名肅、字教夫……此書曦明原拠宋本以為注、文弨復校補以刊行者……

顔氏家訓補注一巻　李詳撰（国粋学報載之）

○清代校注顔氏家訓者、有趙曦明、盧文弨、銭大昕、孫志祖、徐鯤、銭馥、郝懿行、李詳。

説文読若考八巻（郎園四種本）葉徳輝

読画録四巻　原刻〔本〕（周亮工）

清周亮工撰。亮工有閩小紀、已著録。亮工癖嗜画、精鑑賞、収蔵唐宋諸家手跡頗富、海内精画〔絵〕事者、多〔来〕求品題。故収蔵時人作品亦夥、是編列伝者自李日華至章谷凡七十七人、概為亮工生平交遊所及、而明季画家、実亦大体具此矣。伝中専言絵事、或附載題詠。而遺事軼聞、亦多頼以不墜。清修四庫全書、是書曾収入子部藝術類、乾隆五十二年八月十一日内閣奉上諭、現在覆勘文淵等閣所蔵四庫全書、拠詳校官祝堃簽出周亮工読画録、呉其貞書画記内有違礙猥褻之処、已照簽撤改矣。所謂違礙者拠五十三年十月十七日館臣奏摺、因読画録題詩、有人皆漢魏上、花亦義熙余之句。至是並奉命将亮工所撰各書一概査燬。案読画録胡元玉伝、附有夢至元玉家見所余菊一詩云、只似曾過境、柴桑処士居、人皆漢魏上、花亦義熙余、蓋用陶潛劉遺民事、亮工固亦明之遺民、則用義熙作況、有何違礙、即属違礙、又何至一概査燬亮工所撰各書乎。清高宗固一世雄主、馭群臣如駆羊豕、然文人如李清周亮工之流、皆事新朝、固非高踏好名者此、所関係至微、猶復剷及枯骨。雖云懲死者以警当世、然究非仁君所忍為也。今仍拠文淵閣本著録、因通行本不附王時敏等六十九人姓氏、拠張遺所撰是書序、此六十九人中、蓋有至交密友、未及列伝者、然姓氏倶在、実較通行本為佳、故仍拠以著録焉。

書影十巻〔雍正刻本〕

清周亮工撰。亮工有閩小紀、已著録。考清高宗修四庫全書、是書曾収入子部雑家類、乾隆五十三年十月十七

日館臣発覚亮工所撰読画〔書〕録内、有人皆漢魏上、花亦義熙余之句、語渉違礙、因将所撰各書、一概査燬。案館臣所撰是書提要、曽指出援引不得原本者四条、考証未能精核者二条、伝聞不得其実者二条、顚倒是非者三条。然総論是書、則称記述典贍、議論平允、在説部之中、為瑕不掩瑜者、推崇可謂備至、亮工草是編於清室之中、無書可供検閲、故取老人読書只留影子之語、以書影為名、則小有舛誤、不応深責。今案館臣所指十一条外、尚有顕係舛誤者若干条、如巻八呂氏春秋晋文公師咎犯随会、謂随会不与文公同時、案僖二十八年伝城濮之戦、舟之僑先帰、士会摂右、二人正同時也。巻十周人世磧〔碩〕作養書一篇、見論衡、謂養書今恨不見、世碩今亦不知為誰人、則似竟未嘗読漢書藝文志矣。又是書板刻、原刻本甚少。通行者惟雍正三年重刊本、校刻不精毎有誤字。然亦或由於亮工出獄之後、有未及検視原書者。如巻二内郷李蓑字于田、当為子田之誤、宋板許氏説文始於子終於亥、子字当是誤記、巻三魏野明処士、当是宋処士、巻八頼栄受報於親炙之人、当作顧栄、栄事見世説新語徳行篇上、凡此若干条、則又失於刊正者也。

遠志斎詞衷　賜硯堂叢書本　鄒祇謨撰　号程村

経義知新記　汪中　学海堂本

韓詩外伝校注十巻附補逸一巻　畿輔叢書本

清呉棠輯、棠字仲宣、安徽盱眙人、道光□□〔十五〕年挙人、官至四川総督、謚勤恵、是書原題新安周延〔廷〕宋校注、然中有武進趙懐玉校語、周趙二書之出雖先後一年、実両不相見、蓋由呉氏輯入故改題焉。周氏以大戴礼記　呂氏春秋　列女伝　説苑　新序等書校本文、間用己意疏之、趙氏復刺文選注　初学記　太平御覧、援引本文各条、補其闕略、正其訛謬、其有功外伝殆遠在周氏之上也。呉氏此編以周氏本為主、采趙氏校語、臚

列於下、字句之異同、考証之詳略、均両載之、不加論断。然有周趙倶失者、茲挙其一。外伝高子問於孟子曰、夫嫁娶者、非己所自親也。衛女何以得編於詩也。周氏引毛詩序云、柏舟共姜自警也、衛世子共伯蚤死、其妻守義、父母欲奪而嫁之也。誓而弗許、作詩以絶之、按伝則与毛詩同義也。此語殊誤、蓋伝所称衛女者許穆夫人、非共姜也。故下文即引載馳詩曰、既不我嘉、不能旋反、視我不臧、我思不遠、是其明証。趙氏校語謂今孟子外書為正篇載之。此衛女不知是詩何篇、所引載馳不可謂即指此、其説亦非。列女伝仁智篇云、許穆夫人初許求斉亦求之、懿公将〔将与〕許、女因其傅母而言曰、古者諸侯之有女子也。所以苞苴玩弄繫援於大国也。言今者許小而遠、斉大而近。若今之世強者為雄、如使辺境有寇戎之事、維是四方之故、赴告大国、妾在不猶愈乎、今舎近而就遠、離大而附小、一旦有車馳之難、孰可与慮社稷、其後翟人攻衛、許不能救、許夫人馳駆而弔唁衛侯、因作載馳之詩、高子謂嫁娶非己所自親、其指此何疑邪。

清四庫所収外伝亦通行本、不免譌脱、且無補逸、故読外伝者当以望三益斎本（呉氏原刻）為最善焉。

【欄外注】

夜、常氏来り、小学校の大塚、森、坪川三氏も加へて、新陸春にて晩食[87]。

十一月十八日

疎香閣遺録四巻　観古堂刊本

国朝葉徳輝編輯其祖姑小鶯遺事、並伝記題詠而作。小鶯字瓊章、又字瑤期、呉江人、天寥葉紹袁之季女、黄〔横〕山葉燮之女兄、生於明万暦四十四年、歿於崇禎五年、年十七才〔歳〕、未嫁而卒。案紹袁当明鼎革時、隠於浮屠、与其室沈宛君宣修、暨子女輩、怡情書史、一門風雅冠時、小鶯生而早慧、工詩能文、著有返生香一巻、刊入午夢堂全集行世、其生前事跡、歿後霊跡及其遺聞佚事、久為文人学士所豔羨、景仰歌詠、散見諸

家集中。徳輝袁集成編、首小鶯遺像、則従祠堂本縮臨摹刻、次疎香閣玉簪珮、則呉江県令宛平王仏雲寿邇訪修墓址、得于近処農家、次疎香閣眉子硯、則亦寿邇得於袁浦市中、当時曽以拓本徴題、刻有硯縁集行世、次小鶯墓図、則亦寿邇倩人所絵、並按図誌分記、使後之憑弔者、知所問津。徳輝拠以重刻、首巻紀年、如年譜之例、蓋摘取天寥年譜、年譜別記、及其母沈宛君撰伝、渉于小鶯之事、或家事者録之。二巻伝記、為小鶯小伝、及他書所記事跡、雖各家記載甚繁、非踏襲即沿誤、唯択其言之雅馴者録之。三巻冢墓、則墓図兆域、及重修縁起碑刻、倶載焉。蓋其墓為咸豊時王寿邇及其裔孫戟、甫乃湊重修、樹碑立案。於是小鶯遺跡、至今為過客景仰、憑弔流連。四巻題詠、則前賢及近代名人題詠遺像、与遺物之眉子硯、捜輯頗為宏富、述祖徳之清芬、資後人之参証、読袁枚詩話、不致誤為粤人、游戯仙人。亦得長留遺跡於後世。則此輯之旨、不其美歟。

天寥年譜一巻続一巻別記一巻甲行日注八巻　〔呉興〕劉氏嘉業堂刊本　〔明〕葉紹袁撰

紹袁字仲韶、呉江人。天啓乙丑進士、観政兵部、改南京武学教授、輔国子助教、陞工部虞衡司主事、庚午乞養帰、在家十四年、而明社屋、入山為僧、改号天寥道人、年譜作于崇禎戊寅、時年四十九才〔歳〕、続譜成于乙酉、時年五十七才〔歳〕、後事具甲行日注、止於順治戊子九月二十五日、正六十才〔歳〕。距易簀前僅二日耳……譜中叙次字々傷心……差幸其生前、則妻女同証真霊、歿後其子横山燮、以循吏兼文苑、衣鉢有伝……譜中載登莱有忠義十万、不肯従賊、又不肯従清、遣四人間関千里至南部、求朝廷虚名劄付、以振義旅、而奸臣馬士英索賄万金、四人大慟而去、是可与銭澄之田間集所記〔紀〕馬阮之事、足相参証……又譜中載金陵大盗徐復、仮称中山王裔……此譜以〔以為〕大盗冒名、必真確矣。蓋紹袁多親得於見聞、紀載本無曲筆、是皆可為博考参稽之助。有裨於史学、固非浅鮮也。

午夢堂全集　観古堂刊〔刻〕本

明葉紹袁一家夫婦子女之詩文也

田間文集　康キ本

錢澄之撰

田間詩集　鈔本

案澄之在閩、則以黄道周薦、試授推官、在桂、則以瞿式耜薦、御試授庶吉士。又従黄道周学易、伝其緒余、道周式耜、均以不屈殉難、大節凜然……集為其子瀛祖所編、別有左子直潘蜀藻刊本、編為十巻、詩五百八十首、較之此本、多節刪其悲憤之詩、殆為詩諱、不足以覘澄之之本志。

雨村詞話　函海本

楽府余論　宋翔鳳　雲自在龕叢書[88]

選巷叢談二巻　況周頤

頼古堂蔵書甲集十種十四巻

第一冊　四十吉祥一巻

第二冊　皺水軒詞筌　釈冰〔書〕

第三冊　客座贅語　強聒録　六研斎二筆　陳子旅書

第四冊　三十五忠詩　人譜　漁譚

清周在都編（亮工之子）

韓詩外伝校注十巻附拾遺一巻　周廷寀（安徽叢書）第一期

校礼堂集　（安徽叢書）第四期
周亮工　尺牘新鈔　（海山仙館〃〃）

○風雨楼叢書
晨風閣
函海

【欄外注】夜、橋川氏に招かれ厚徳福にゆく。[89]

十一月十九日
家彝来ル。北海五龍亭にて点心。[90]
松井秀吉氏を訪ふ。
共に真武氏を訪ひ、晩食を共にす。
真武氏と語り、色々得る所あり。近頃北京大学の様子などきく。
帰宅十時すぎ。周作人氏の手紙机上にあり。

十一月二十日
午後、趙蔭棠氏を訪ふ。景山西大街西板橋甲一二。
色々『詞林韻釈』その他の事を問ふ。
氏に一部の『詞林韻釈』あり。

光緒庚子冬　盛山官舎開鋟

顧復初の序

光緒己亥望江余誠格叙

大興胡薇之序

菉斐軒詞韻

宋紹興二年内府審定

趙氏は、上海の葉氏[91]の得たりといふものは即ち之にして、もとより偽作也といふ。随庵徐氏[92]のもの又偽作也。

一、『中原音韻』――卓従之『中州楽府音韻類篇』――『瓊林雅韻』――『詞林韻釈』

王文璧ノ『中州音韻』と嘯余譜本『中州音韻』（北大影印）とは本来同一のもの也。卓従之のものに非ず[93]。

その他清濁陰陽につきて色々質問して、得たる所少なからず。

文化事業にて本を見る。

度	諸名家定本
曲	重訂中原
須	音韻　九思堂蔵板
知	

[94]

中原音韻序

蓋聞歌声四起太史因而陳風律呂互宣王者因之正楽故楽府為詩余流派匪属淫哇而伝奇実楽府濫觴総関風雅宋詞

元曲競爽梨園南板北絃各緣習気嬌喉奪錦梁塵月底驚飛雅調争妍谷鳥風前欲墜不因刁斗孰按宮商然而学士才疎悞続休文韻脚藝人識蔆幾回公瑾韶顔使声偶樊然致知音莞爾是以勝国奏徳清之絶技。明興擅文璧之材華攷百氏之訛寸心幾嘔訂分毫之弁脩髯欲枯理析陰陽大江東寘将軍鉄版韻諧宮徵楊柳岍聴幼女清歌茀墨本未流属元声久秘璚珠懐袖能韜不夜之光良[95]

中原音韻凡例

一、翻切圏註悉遵正韻其旧本○〔有〕而正韻無者闕之或正韻有而旧本少者補之

一、定字以声之清濁用字者当随○〔声〕措字分韻以声之上下用韻者当随字成文

一、毎韻各起平声次上声次去声而入声分隷三声叶而用之総十九韻而四声皆在其中矣

一、牙舌唇歯喉及舌歯各半之音散出各韻分別陰陽清濁而用

一、字同義同或両見者註切不同有字同而義不同者随韻分註有一字而収入二三韻者各有所用並存之

一、韻字点画並依正韻改正如字?同而点画不同者去之

一、各韻以平声提起而属以上声去声者聚以類也以入声難諧而随韻分隷三声者○〔協〕以正也

一、閉口字音類分在後三韻間有一二当閉而収入開口韻者叶之以正不可得而閉也

一、入声派入平上去三声者以広其押韻為作詞而設耳然呼吸言語之間還有入声之別

一、中原音韻的本内平声陰如此字陽如此字蕭君欲鋟梓以啓後学値其早逝泰定㊣〔甲〕子以後嘗写数十本散之江湖其韻内平〔平声〕陰如此字陽如此字陰陽如此字夫一字不属陰即〔則〕属陽不属陽則属陰豈有一字而属陰又属陽也哉蓋伝写之謬今既的本刊行或有得余墨本者幸毋譏其前後不一也

一、音韻内毎○是一音以易識字為頭止依頭一字呼吸更不別立切脚

一、音韻内毎○〔×〕是旧本所無皆係増入

一、音韻不能尽収広韻如崆峒之崆覂駕之覂倥〇〔傯〕之倥鵓鴿之鵓諸字之類皆不肯〔可〕施于〇〔詞〕之韻脚

作者毋誚其不備

一巻

東鐘　江陽　支思　斉微　魚模　皆来　真文　寒山　桓歓

二巻

先天　蕭豪　歌戈　家麻　車遮　庚青　尤侯　侵尋閉口韻　監咸閉口韻　廉繊閉口韻

中原音韻巻一

高安　周徳清　編輯

呉興　王文璧　増註

古呉　葉以震　較正

東鐘

平声　陰

〇東多龍切又江陽韻　冬×　蝀蠕—虹也又去声　〇鍾之戎切酒器　鐘楽器　中　忠　東　終　×螽—斯羽虫也　衆又去声　〇通　……

【欄外注】

この書後来薫閣一度持参せり。『中原音韻』の異本の一つなり。

中原韻広義四巻（抄本）[96]

東鍾

平声　陰

東　多龍切動也春力也又丁東玉珮声東：鈴鐸声皆見唐宋人詩又姓又江陽韻

冬　四時之末終也尽也又蔵也

重訂原本
午夢堂六種
謝斎蔵板

(97)

午夢堂集序

崇禎己卯重陽節日〔日〕西峯居士曹学佺能始撰

序

崇禎丙子春王三月天寥葉紹袁撰

……長女昭斉逾二十以鬱死、季娘瓊章方破瓜以仙死、今宛君又以孝慈感悼、短算長徂。流水帰〔無帰〕彩雲去遠。遺文在篋手沢空悲珠玉停輝瓊瑶隕〇〔色〕。甚矣才之累人矣。

序

葉紹袁仲韶撰

鸝吹　午夢堂遺集

呉江　沈宜修宛君

題疎香閣　三女卜夫々次韻

夜夢亡女瓊章

東風夜初回、紗窓寒尚冽。徘徊未成眠、銅壺催漏〇〔徹〕。偶睡夢相逢、花顔逾皎雪。歓極思茫然、離懐竟難説。但知相見歓、忘卻死生別。我問姉安在、汝何不同挈。指向曲房東、静把書篇閲。握手情正長、恍焉

驚夢咽。覚後猶牽衣、残灯半明滅。欹枕自呑声、肝腸尽催折。

仲韻卜和韻ノ詩多シ

哭長女昭斉

……余遭三女之変、哀莫能伸、豈意七十日間、又如此禍、何昊天不仁、至斯荼毒也……前三女亡時、因其婚期在邇、日夕倥偬、又生平未曽経此、意中実無虞慮。直待亡後、驚悼悲駭、不知所出、悔云晩矣。故長女臥病、病〔時〕月之内、余為百計営求、日祷竺乾、慈悲莫救、遍尋鴻術、参术無霊、終於永別……

七夕思両亡女

乞巧年々事、愁懐逾往常。鵲橋填旧約、瓜菓薦新涼。綵縷難穿涙、金針只刺腸。寄言河漢女、休弄巧絲長。

○鸝吹　上下巻

○鸝吹集　梅花詩一百絶　　松陵沈宜修宛君著

○鴛鴦夢

小序

鴛鴦夢、余〔予〕甥蕙綢所作也。諸甥姪皆具逸才、謝庭詠絮、璧月聯輝、洵為盛矣。迨夫瓊摧昭折、人琴痛深、本蘇子卿昔為鴛与鴦之句。既以〔已〕感悼在原、而瓊章殞珠、又当于飛之候、故寓言匹鳥、託情夢幻、良可悲哉。若夫詞曲一派、最盛于〔於〕金元、未聞有擅能閨秀者。即国朝楊升庵、亦多諸劇、然其夫人第有黄鶯数闋、未見染指北詞。綢甥独出俊才、補従来閨秀所未有、其意欲于〔於〕無仏処称尊耳。吾家詞隠先生為詞壇宗匠、其北詞亦未多概見。余伯道無児、育瓊章為猶女、愛其絶世霊識、欲与較論宮商、揣

桃花扇底之風、一証詞家三昧、傷弁絃〔弦〕往矣。今綢甥作、其俊語韻脚、不讓酸斎夢符諸君、即其下里、尚猶是周憲王金梁橋下之声、実可与語此道者、将以陰陽務頭、従来詞家所昧、行与商之。（蕙綢即詞隱先生孫婦）

崇禎丙子秋日舅氏沈君庸甫識

鴛鴦夢（楔子ト四齣アリ）

呉江　葉氏小紈蕙綢撰

正　三仙子吟賞鳳凰台

名　呂真人点破鴛鴦夢

第二齣

（脱布衫）雨糸々難繫離愁。倩西風吹尽離愁、欲待訴知音何処有訴青天怕天消瘦

又

（么）聽蕭々敗葉将窓叩銀灯黯冷淡香籌雨不休風還又恰天香時候可正是風雨替花愁

○窈聞

呉江　天寥道人葉紹袁撰

甚多迷信的ナリ

余賦性迂直、不敢欺人、亦不祈人信以為真有。雖群口交羨、無救我女之亡。以為仮託、正如蘇文忠公所云、子姑妄言之、資高人玄士、塵尾譚末、不亦可乎。故挙夢遇目治、悉附殺青。

続窈聞

〔呉門〕泐庵大師、陳隋宿徳也。親受天台智者大師止観之教、歴千余年、堕神趣中、現女人身、能以仏法行

冥事……余家恭設香花幡幢、敦延鑾馭。午間、先有女史傅遥々至云、師待下春〔春〕時、方可至此。余同諸人屏気佇候、良久師至……

余又問亡女小鶯

師云、月府侍書女也。　余問、月府即世所伝広寒宮邪。

師云、非也、固別有耳。然則何故下謫。

師云、遊戯。　余問、遊戯何以必至我家。

師云、神仙遊戯、固必択清節之家、且昔与君曽相会故也。

○伊人思　小引及跋語

崇禎丙子　天寥葉紹袁

沈宜修宛君輯

（名媛詩選ナリ）

○愁言（芳雪軒遺集）

序……我女自十七結褵、今二十有三才〔歳〕而殀……

葉氏紈紈昭斉著

○返生香（疎香閣遺集）

崇禎壬甲十有一月一日沈自炳君晦題

以上、午夢堂集

毛稚黄著書[98]　小匡文鈔
潠書　韻学通指
螺峯説録　稚黄子文洧
韻白　詩弁坻
鶯情集選（詞アリ）　東苑詩鈔
東苑文鈔　晩唱
蕊雲集

潠書八巻（文集ナリ）

序

順治辛丑秋日広陵黄雲僊裘氏拝撰

序

癸丑冬日予遊武林寓西湖之昭慶寺、一日走訪毛稚黄先生……亡友鄒程邨客武林時亦嘗鈔稚黄文数篇以賜序。見之即刻之入文統……

康熙癸丑冬日毘陵年家同学弟陳玉璂椒峯拝撰於昭慶寺東竹院

文ニ格物説ナドアリ

小匡文鈔　思古堂蔵板

自序

書、論、議、弁、説、序、伝、雑文、誡、箴アリ

錢唐毛先舒稚黃（一名騄字馳黃）著

同　学　諸　子　批

螺峯説録

綜概

聖人之学深入於無生死之学也……

了生死語老氏略言之、釈氏評言之、聖賢則時乎微及之、何以時乎微及之也、恐人之惑也……

上巻第一：聖人出世間法説、第二：太極説

山室、布施両君と食事後、吉祥に楊少（ママ）楼、赫寿臣の「連環套」を見る。[99]

注

（1）ノートの体裁等については、拙稿「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）」参照。

（2）山本守（一九〇六～?、『北平日記』七二頁注九七）は、当時新京在住。筆者を迎えに奉天まで来て以降、同行していた。中根は、筆者が北京で下宿していた家。中根斉（一八六九～一九五二、『北平日記』五九頁注二五）は、満洲国嘱託として商標法制定に携わった後、奉天で特許弁理士をしていた（「列伝中根斉」、『続対支回顧録』、東亜同文会、一九四一年、下巻四三八～四四五頁参照）。後段の「五十（いそ）ちゃん」も中根家の人。

（3）杉村勇造（一九〇〇～七八）は、東京都生まれ。一九一九年財団法人無窮会漢学研究生となり、一九二四年より三年

間北京に留学して馬衡や徐鴻宝に師事した。一九二七年東方文化事業総委員会図書籌備員となる。満洲国建国後は、国立図書館、国立奉天博物館の開設に携わり、『纂組英華』（「北京旅行日記（一）」一九八頁注二一）編纂に従事、一九三三年より満日文化協会常務主事（のち理事に昇任）として熱河の文物整理に従事した。戦後は、東京国立博物館図書室長、大東文化大学教授などを歴任し、日中の文化交流に尽力した。著書に『乾隆皇帝』（二玄社、一九六一年）、『遼の陶磁』陶磁大系四〇（平凡社、一九七四年）など。『近代日中関係史人名辞典』（東京堂出版、二〇一〇年）三二三頁ほか参照。

（4）山田文英は、『北平日記』二二〇頁注二六。輯安（吉林省通化市集安市）は、鴨緑江の中流北岸に位置し、高句麗広開土王碑がある。一九三五年五月に壁画のある古墳二基が発見され、同年秋と翌年秋に調査が行われた（筆者訪問時は第二回調査中）。報告書に池内宏述・銭稲孫訳『満洲国安東省輯安県高句麗遺跡』（満日文化協会、一九三六年六月）、池内宏『通溝／巻上　満洲国通化省輯安県高句麗遺跡』（日満文化協会、一九三八年）、池内宏・梅原末治『通溝／巻下　満洲国通化省輯安県高句麗壁画墳』（日満文化協会、一九四〇年）がある。

（5）江幡寛夫は、筆者の友人で満洲国文教部編審官（「北京旅行日記（一）」二〇五頁注五九）。

（6）水野梅暁（一八七八～一九四九）は、広島県出身の僧侶。京都大徳寺高桐院で修行後、一九〇一年東亜同文書院一期生に編入、一九〇三年長沙に移り王先謙や葉徳輝らと交流し、他方で日中仏教界の提携を目指した。武昌蜂起（一九一一年十月）の際、中国人負傷者救済活動を通じて鄭孝胥（注12参照）と親しくなった。一九二四年より『支那時報』を主宰、一九三二年日満文化協会理事就任（前掲『近代日中関係史人名辞典』五三八頁ほか参照）。筆者が貰った本は水野梅暁『満洲文化を語る』（支那時報社、一九三五年）か（目加田家旧蔵資料整理時記録参照）。本書は、「熱河に現存せる貴重な文献」、「注目すべき尊孔運動の前途」、「満洲国図書館の保有せる文化的資料とその価値」、「満洲国国立博物館に収蔵せる刻糸に就いて」、「清朝実録の出版について」など十二篇を収録。

（7）三中井（みなかい）百貨店は、中江勝次郎（一八七二～一九四四）が、朝鮮半島を中心に展開した百貨店チェーン。新京店は、一九三三年十二月、日本橋通りに開店した（林廣茂『幻の三中井百貨店――朝鮮を席巻した近江商人・百貨店王の興亡』、晩聲社、二〇〇四年参照）。

（8）羅振玉（一八六六～一九四〇、「北京旅行日記（一）」一九九頁注二五）について、筆者は「羅振玉氏はいわゆる中国風の大人でゆったりと椅子に坐ってにこにこして『御飯を食べて行かぬか』などといわれる。むろんすぐ失礼しようと

すると、白いあたたかい大きな手で握手をされ、それが非常に印象深かった」と回想している（「論文集のあとに」、『目加田誠著作集』第四巻、龍渓書舎、一九八五年、五一八頁）。同席していた息子は、五男羅福頤（一九〇五～八一）か。七歳から十三歳まで父に随って京都に滞在し、帰国後は父の金石学を継承した。この年に出版された父の著書『三代吉金文存』編纂に従事している（董宝厚「羅福頤著作年表稿」、『遼寧省博物館学術論文集第三輯（一九九九―二〇〇八）』第四冊、遼寧省博物館、二〇〇九年、一一九～一二五頁参照）。『清朝実録』（『清実録』）四三五五巻は、清の太祖ヌルハチから光緒帝まで皇帝の事跡を編年体で編纂した史書で、満洲文、モンゴル文、漢文の三文体による。紫禁城などに写本が保管されていた。このうち奉天の崇謨閣所蔵の漢文本を一九三七年頃から満洲国国務院が影印出版した。

（9）松浦嘉三郎（一八九六～一九四五、「北京旅行日記（一）」二〇五頁注五七）は、当時大同学院教授。

（10）曽恪は、字叔度、四川省華陽の人で、当時六三歳。京師大学堂で学び、京都帝国大学法科を卒業した。法科学堂教習、大総統府秘書、国務院参議、経済調査局副総裁、熱河省公署秘書長、日満文化協会評議員などを歴任した。著書に『夜起庵弟子記』（満州行政学会、一九三八年）のほか『漢訳日本小倉百人一首』、『不動産資金化論』、『英漢対音定式』など。前掲『満洲文化を語る』二八頁、「アジア歴史資料センター Ref.B05015988600、七．日満文化協会満洲国側委員略歴送付ノ件 昭和九年四月（H-6-2-0-29_3）（外務省外交史料館）」参照。

（11）杉野啓「康徳四年度新京防空演習に於ける建築物の灯火管制に関する調査並感想」（『内務資料月報』第一巻第四号、満州行政学会、一九三七年十月、六二～六七頁）は、一九三七年七月中旬に初の大規模な防空演習を行ったと記すが、小規模演習は既に開始されていたのであろう。

（12）この詔勅は、一九三五（康徳二）年五月二日に出されたもので、一節に「日本天皇陛下ト精神一体ノ如シ」とある（『読売新聞』一九三五年五月三日夕刊一頁参照）。鄭孝胥（一八六〇～一九三八）は、満洲国初代国務院総理。福建省閩県の人、江蘇省蘇州府生まれ、字は太夷。一八八二（光緒八）年の挙人で、日本へ書記官として赴任した経験をもつ（一八九一～九四）。溥儀の忠臣で、紫禁城退去に従い、満州国にも同行した。詩人や書家としても知られ、著書に『海蔵楼詩集』などがある。満洲国の実権を握る関東軍を批判したため、一九三五年五月二十一日に更迭された（橋川時雄『中国文化界人物総鑑』〔名著普及会、一九八二年覆刻〕七一三頁ほか参照）。後任総理は、関東軍の推薦を受けた張景恵（一八七一～一九五九）。

（13）当夜の回想が、前掲「論文集のあとに」五一八頁にある。

(14) あじあ号は、一九三四年より南満州鉄道が運行した豪華特急列車。新京―大連間（約七百キロメートル）を八時間半で結んでいた。列車の大半は、日本の技術により設計、製作された。機関車二両が瀋陽鉄路陳列館に展示されている。「あなたの特派員――あった！旧満州縦断の超特急列車『あじあ号』威風」（『西日本新聞』二〇二一年五月七日夕刊一頁）ほか参照。

(15) 満洲国立奉天博物館は、「北京旅行日記（一）」一九八頁注一九。丸中ホテルは、同二〇二頁注三八。

(16) 刻糸は、中国伝統の綴織（「北京旅行日記（一）」一九八頁注二〇）。（清初）王翬、（明）文徵明、（清）金冬心、（明）祝枝山、（明）唐寅は画家。史可法は、明末の忠臣で明の再興をはかったが果たせずに清軍に殺された。「満洲国立博物館陳列品目録」（『満蒙』第十六巻第七号、満蒙社、一九三五年七月、一七三～一八〇頁）に、王翬「翠微山寺図」・「松渓野鶴図（楊晋と連名）」（第十一室）、同「夏山図」・「明月泛舟図」（第十四室）、文徵明「後赤壁賦図巻」（第十五室）、金冬心「写生花果図」（第十四室）、祝允明「前赤壁賦図巻」（陳榻と連名、第十五室）、唐寅「修篁書屋図」（第十五室）が記載されている。史可法の書は未詳。

(17) 阿部国太郎（一八八九年生）は、群馬県出身。一九二三年陸軍経理学校卒業後、陸軍に入り、一九三二年九月より満洲国国務院兼務、一九三五年九月熱河省公署総務庁経理科長となる（中西利八編『昭和十二年版満洲紳士録』〔満蒙資料協会、一九三七年。『日本人物情報大系』第十三巻、皓星社、一九九九年覆刻〕七六頁参照）。河瀬松三は、満洲国文教部職員（「北京旅行日記（一）」一九九頁注二六）。

(18) 奉山線（現在の瀋山線）は、南満州鉄道の路線で、奉天（瀋陽）から山海関を結ぶ約四二〇キロメートル。錦県（遼寧省錦州市）で承徳行き（一九三六年六月開業、当時は錦承線と称す）と分岐する。朝陽（遼寧省朝陽市）は、錦承線にある。『国線旅行案内』（鉄路総局、一九三六年五月）ほか参照。

(19) 第一ホテルは、前掲『国線旅行案内』七〇頁に記載がある。

(20) 三座塔は、北塔、南塔、東塔の三仏塔の総称。北塔（高さ四二・六メートル）の遡源は、北魏孝文帝太和年間に建てられた思燕仏図塔で、以後五度の大規模改修が行われ、十三段の煉瓦建築となった。内部は空洞で、四方に浮彫りの仏像がある。南塔（高さ約四五メートル）は、遼代の建築と推定されるが、当時すでに劣化が進行しいた。東塔は、北魏の頃の建造と推測されるが、乾隆八（一七四三）年以前に倒壊し、基礎部分のみとなった。現在、北塔と南塔は全国重点文物保護単位指定。八木奨三郎『錦州省之古跡』満洲国古跡古物調査報告書第一編（満州国文教部、一九三六年）二

八五～二九三頁ほか参照。

(21) 佑順寺は、朝陽城内南部にある市内最大規模広大な敷地を持つラマ教寺院。勅命により十年がかりで康熙四十六（一七〇七）年に竣工した。境内には天王殿、関帝殿、大殿とその左右に蔵経閣などがあり、蒙古文大蔵経を伝存していた。前掲『錦州省之古跡』二七八～二八〇頁ほか参照。

(22) 凌源（遼寧省朝陽市）、平泉（河北省承徳市）は、錦承線の駅。

(23) 鉄路愛護村（鉄道愛護村）は、南満洲鉄道が、鉄道を抗日ゲリラの攻撃から防衛するため、関東軍と連携して沿線に銃器を所持した日本人農民を入植させたもの。一九三三年九月に始まり、一九三六年三月時点で三一五〇村にのぼったという。原田勝正「『満州国』成立後の戦略体制と鉄道建設」（『東西南北』一九九九、和光大学総合文化研究所、一九九九年、八三～九九頁）ほか参照。

(24) 『満支旅行年鑑　昭和十五年』（ジャパンツーリストビューロー、一九四〇年）によれば、ステーションホテル（駅ホテル）は、南満洲鉄道総局直営で、駅舎楼上にあり、宿泊料は三円均一。春日ホテルは、太平橋通にあり、宿泊料は四～五円（七〇～七一頁）。

(25) 顧問部は、満洲国国務院傘下の軍政部に属し、軍政部と各省の警備司令部に置かれた。顧問は日本人で、人事・兵器・経理を所掌した（アジア歴史資料センターアジ歴グロッサリー「インターネット特別展 公文書に見る外地と内地――旧植民地・占領地をめぐる人的還流――」内「軍政部」の項参照、URL＝https://www.jacar.go.jp/glossary/term2/0050-0030-0040-0040-0150.html、最終確認日二〇二一年十月十八日）。千葉一郎大尉は、未詳。一九三五年八月十六日『朝日新聞』朝刊二頁記事「我視察団を一斉射撃　不法な保衛団」の承徳発一行に「千葉大尉」の名がある。熱河離宮（避暑山荘）は、清朝康熙帝が避暑用の山荘として十八世紀初頭に造営し、乾隆帝が増築した。広大な敷地に殿閣や寺廟が並ぶ。満洲国建国後、水野梅暁、杉村勇造、関野貞、伊東忠太らが文化財を調査した。一九九四年世界文化遺産登録。

(26) 日田次郎（一八八七年生）は、北海道出身、一九一四年東亜同文書院卒業、同会本部勤務、関東州公学堂教諭、南満洲鉄道職員などを経て、一九三二年七月満洲国国務院文教部に入り、一九三四年十二月熱河省公署教育庁に着任した。前掲『昭和十二年版満洲紳士録』二二九頁参照。

(27) 大蔵経は、熱河のラマ寺院より熱河公署内に集められたもの。満洲語翻訳は、乾隆三十八（一七七三）年二月の上諭により二十年近くかけて完成した。フランス国立図書館所蔵のものが唯一とされていたが、一九三三年、水野梅暁が熱

河でその存在を再確認し、東北帝国大学嘱託多田等観（一八九〇～一九六七）に精査を依頼した。その後、杉村勇造が発見したものも含め、西蔵（チベット）文十一部、満洲文と蒙古文各一部を数えた。黒田源治編『熱河――宝物館・避暑山荘・尊経閣』（満日文化協会、一九四一年）は「最重要なるものは満蒙蔵の蔵経である……殊に豪華な彩色ある夾板に挟まれた満文蔵経はもと珠像寺にありしもの、西蔵文蒙古文の甘珠爾が数種あることは本館の大なる誇である」（六～七頁）と記す。ほかに前掲『満洲文化を語る』参照。

(28) 文廟（孔子廟）は、承徳市街地の西北にある。乾隆四十四（一七七九）年五月竣工。乾隆帝は「熱河文廟碑記」を書し、親臨して釈奠の礼を行い、祭器として周代の銅器を献納した。

(29) 尊経閣は、文廟の東端にあり、『聖祖詩文全集』など三七〇函余が頒蔵されていた。杉村勇造「熱河尊経閣所蔵善本書目（大同二〔一九三三〕年八月調）」（前掲『熱河――宝物館・避暑山荘・尊経閣』一〇九～一二七頁）掲載頁は以下のとおり。『文献通考』一一七頁、『周易王注』（『御定仿宋相台岳氏本五経』之一）一一〇頁、『篆文六経四書』一一二頁、『康熙字典』一一三頁、『涑水伝家集』一二五頁、『石鼓文』・『棉華図』一二〇頁。『棉花図』（乾隆三十年直隷総督方観承撰進）は、種まきから綿布完成までの工程十六段階を描いたもので、一九三七年に満洲棉花協会より吉川幸次郎・榎本中衛訳『御題棉花図』が数量限定で影印出版され、一九四二年に筑摩書房より改訂版が公刊された。吉川は「改訂本の序」に、琉璃廠の古書店来薫閣の店主陳杭（河北省出身）が訳出に協力したと記す。

(30) 夏玉清（一八九六生）は、奉天省出身、一九二四年北京高等師範数理部中退、吉林黒竜江榷運局勤務などを経て一九三二年に熱河省公立女子初級師範学校校長となり、一九三八年に承徳女子国民高等学校校長に転じた（『第三版満洲紳士録』〔満蒙資料協会、一九四〇年、『日本人物情報大系』第十四巻、晧星社、一九九九年覆刻〕二六六頁参照）。張哲生は未詳。

(31) 宮殿は、山荘の東南隅に位置し、正殿、松鶴斎、東宮から成る。戲台（清音閣）は、東宮内にある三層楼。関野貞・竹島卓一『熱河――解説』（東方文化学院東京研究所、一九三七年）五〇頁参照。

(32) 鈴木部隊副官は未詳。中山孝一は、山口県出身の陸軍士官学校二八期、一九四三年八月に北支那特別警備隊第一警備大隊長となった憲兵大佐か（総理庁官房監査課編『公職追放に関する覚書該当者名簿』〔日比谷政経会、一九四八年〕「三憲兵」一五八頁、防衛庁防衛研究所戦史『北支の治安線（二）』戦史叢書第五〇巻〔朝雲新聞社、一九七一年〕四三七頁参照）。河村又介（一八九四～一九七九）は、九州帝国大学教授（一九三二年八月着任、憲法講座）で、山口県立山口中

学校、第七高等学校、東京帝国大学法科大学政治学科卒業（河村力『ある憲法学者の足跡――元最高裁判事河村又介の生涯と現代史の一断面』、文芸社、二〇〇五年、三七六頁参照）。

(33) 万樹園（筆者は「万寿園」と記す）は、離宮裏の湖沼よりさらに北側に広がる広大な草原で、古くは宴会や馬技などが催されていた。前掲『国線旅行案内』は「苑内には無数の鹿が住んでゐて奈良を思はせるものがある」と記す（七四頁）。熱河泉は、熱河の地名の由来となった泉がある場所。紀恩堂（万壑松風殿）は、松鶴斎の北端にあり、離宮の苑池が一望できる。建物の北面に康熙帝御筆「万壑松風」、南面に乾隆帝御筆「紀恩堂」の額がある。行頭は、演劇の衣裳道具の総称。乾隆時代の品々七十余櫃が蔵されていた。楠木殿は、正宮の正殿である澹泊敬誠殿の別称で、中国南部から楠木材を運び込み建造された。康熙帝の意向により、瓦も含め彩色や装飾などはなく「簡素の裡に頗る高雅の気象を帯ぶる所、我日本趣味に契合する所がある」（前掲『熱河――解説』三九頁）。ほかに前掲『熱河――宝物館・避暑山荘・尊経閣』参照。

(34) 熱河宝物館は、一九三五年二月竣工。翌年八月に黒田源次、三枝朝四郎が陳列したのち公開された（前掲『熱河――宝物館・避暑山荘・尊経閣』黒田源次「序」及び満洲国史編纂刊行会編『満洲国史　各論』満蒙同胞援護会、一九七一年、一一一九～一一二〇頁参照）。辛亥革命後、熱河都統熊希齢により離宮内の宝物や文津閣四庫全書など貴重文物の大半は北京へ搬出され、以後も破壊や略取が続いた。文廟にあった銅器十点は「民国以後幾度か逸亡の恐ありしを土地の搢紳等の協力管理によりて今日あるを得」たもの（前掲『熱河――宝物館・避暑山荘・尊経閣』三一～三四頁参照）。銅版画は「尊経閣旧蔵。之等諸図は清朝文華の極盛期を語る遺物にして、伊犁平定図は郎世寧等内廷供奉の西洋人画士四名 Castiglione, Sickelbart, Damascene, Attiret の起稿になり巴里に於て銅刻摺印」されたもの（同書三一頁、写真は図版一〇～一二頁）。「乾隆御筆熱河文廟碑記」は「金粟山蔵経紙にかゝれた乾隆帝自筆の書冊で、彫刻ある紫檀の夾板をもつて美事なる装幀を施されたもの」（同書三頁。全文は同二〇～二一頁、写真は図版八頁）。ラマ塔の品目は同書四一～四二頁、写真は同図版二七～三〇頁にある。

(35) ラマ廟群は、避暑山荘の外輪東・北側に並ぶ。辛亥革命後、保護者を失い、軍閥の略奪に遭うなどして荒廃が進んだ。満洲国建国後、仏像等の搬出を禁じるなどその保護に着手、離宮内に古跡特別調査所を設け、一九三八年より修復作業が始まった。大仏寺（普寧寺の別称）は、乾隆二十（一七五五）年五月に準噶爾を平定し、四衛拉特部落の四族長が皇帝に拝謁したのを記念して建てられた。殊像寺は乾隆三十九年、満洲人のために建てられた。同寺の文殊菩薩像は乾隆

帝がモデルであるとの説が篤く信奉されていた。布達拉寺（普陀宗乗廟）は、山荘の北にある熱河最大のラマ廟で、乾隆三十六年竣工。山門より廟の最後部まで四百五十メートルの間に約五十の西蔵様式建物があり、高層ビルの様相を呈する。行宮寺（須弥福寿廟、札什倫布廟とも称す）は、布達拉寺の東にある。乾隆四十五年創建で、大紅台中央の妙高荘厳殿は金鍍金を施した銅瓦を用いるなど豪華な建造である。前掲『満洲文化を語る』、三浦浩『熱河観光案内』（東亜旅行社満州支部、一九四二年）、田中禎彦「満州国における熱河古蹟の調査保存事業――日本植民地における歴史的建造物の調査保存と異文化理解」（『日本建築学会計画系論文集』第五六九号、日本建築学会、二〇〇三年、二〇一～二〇八頁）ほか参照。

(36) 『日本都市大観付満洲国都市大観　昭和十一年版』（大阪毎日新聞社、一九三六年）の承徳の「料亭旅館」の項に「カフェー日に増加し芸妓、娼妓、女給数も増加しつゝある」と記す（九七五頁）。

(37) 古北口（北京市密雲県古北口鎮）は、北京市街の北東、山海関と居庸関の間にある。当時の鉄道は承徳駅止まりで、承徳―古北口間（一〇二キロメートル）、古北口―北平間（一四〇キロメートル）にそれぞれ一日一往復バスが運行されており、古北口での待機時間は二時間であった（前掲『国線旅行案内』七三、七五頁参照）。

(38) 前掲『日本都市大観付満洲国都市大観　昭和十一年版』承徳の交通機関の項に「満洲国では、熱河省の開発はまづ交通からとの見地から約二万人を動員して産業道路、鉄道の建設に努力してゐる」と記す（九七五頁）。

(39) 前掲『国線旅行案内』は「古北口は承徳―北平間の街道を扼する天嶮として古来最も著名な要関である。又、この古北口に於ける長城の景観は、その白眉と云はれている」と記す（七五頁）。

(40) 南天門は、古北口鎮より河沿いに約十キロメートル降った付近。

(41) 密雲は、現在の北京市密雲区密雲鎮。

(42) 筆者は「北京の城壁が暗がりの中で聳えているのを再び見て、私は胸をおどらせた」と回想している（前掲「論文集のあとに」五一八頁）。

(43) 坂田組（阪田誠盛〔一九〇〇～七五〕代表）は、承徳―古北口間で日本軍用品運行を名目に一九三三年八月より運行を開始し、一九三五年七月二十七日、南満洲鉄道に移管した。「アジア歴史資料センターRef.B10074646000、支那ニ於ケル自動車其他車馬交通関係雑件 第二巻（F-1-9-2-9_002）（外務省外交史料館）」、「同 Ref.C01003082300、北支に於ける自動車路線経営の件（防衛省防衛研究所）」、佐野眞一『阿片王――満州の夜と霧』（新潮社、二〇〇五年）ほか参照。終

点位置は未詳。

(44) 布施昌三は、北京近代科学図書館職員。「北京近代科学図書館一週年報告」（『戦前期「外地」図書館資料集―北京編』第二巻、金沢文圃閣、二〇一四年）「本館主要職員就任月日」欄に「助理」と記す（在任期間＝一九三六年十一月一日～三七年四月十日、三二一頁）。筆者の回想が「誰か八木香一郎君を知らないか 古い北京」（『春花秋月』、時事通信社、一九九二年、六五～六九頁）にある。

(45) 山室三良（一九〇五～九七、『北平日記』一五四頁注一五〇）は、九州帝国大学支那哲学科出身、当時は北京近代科学図書館館長代理として開館準備に奔走していた。筆者は後日開館式に出席、記念講演を行う。

(46) 鹿鳴春は、王府井近くの八面槽にあった福建料理店。安東更生『北京案内記』（新民印書社、一九四二年）二六四頁参照。

(47) 一声館は、東城船板胡同にあった旅館（『北平日記』五九頁注二七）。

(48) 大塚正雄は未詳であるが、一九四〇年十二月より翌年九月にかけて、『建築世界』（建築世界社）に四論文がある（「吉林の住宅（一）（二）」、「吉林の宗教建築（一）（二）」）。筆者は一九二九年夏、北京へ二十日余り旅行した（「大学」、『随想秋から冬へ』、龍渓書舎、一九七九年、六五頁参照）。

(49) 東方文化事業総委員会総委員会事務所は、王府井沿いの東廠胡同にあった（『北平日記』二五頁注十二・十八、二七頁図）。小竹武夫（一九〇五～八二、同書二五頁注一五）は、同委員会図書部主事。橋川時雄（一八九四～一九八二、同書二六頁注二三）は、同委員会総務委員署理（実質的責任者）。

(50) 北海公園は、故宮の北西部にある人工湖を中心とした公園（『北平日記』二九頁注四二）。画舫斎は、北海の東岸にある元離宮（同書二二七頁注六七）。漪瀾堂は、北海に浮かぶ瓊華島の北部にある建物群で、皇帝が船遊びや釣りの後に休憩する場所として乾隆時代に建設された。

(51) 銭稲孫（一八八七～一九六六）、は、清華大学教授で日本文学を教えていた。自宅は、西城の受壁胡同にあり、筆者は一九三四年十一月より帰国まで銭稲孫宅に寄寓した（『北平日記』四一頁注一三六）。

(52) 中原公司は、王府井にあった百貨店（『北平日記』一六〇頁注九）。銅元は、当時の銅貨（同書六〇頁注三二）。

(53) 篋子は書箱。『徐霞客遊記』は、明末の徐宏祖（霞客は号）の旅行記で、十巻本、二十巻本などがある。二十代から三十余年にわたり中国のほぼ全土を巡った記録。没後整理され、乾隆四十一（一七七六）年に刊行された。「同文版『二十

四史』」は、上海同文書局光緒十（一八八四）年刊または五洲同文局一九〇三年版と思われる。

(54) 「丁香結」は、丁香のつぼみのこと。転じて固く結ばれて解けない憂いを指す。当時の日中関係の暗喩か。

(55) 段玉裁（一七三五～一八一五）は、江蘇省金壇の人、『説文解字注』などで著名な考証学者。宋翔鳳（一七七七～一八六〇）は、字虞庭（または于庭）、江蘇省長洲の人で『論語説義』十巻などを著した。

(56) 大槻敬蔵（一八八五～？）は、東方文化事業総委員会総務部主任兼会計部主任（『北平日記』二五頁注一四）。

(57) 北平近代科学図書館を指す。山室三良の提案などにより、東方文化事業の一環として開設された。日本語図書や中国における日本研究図書を蒐集し一般公開したほか、日本語講座や展示会を開催するなど活発な活動が行われた。山室の提案から開館までは数ヶ月しかなく、準備に奔走していた。小黒浩司「北京近代科学図書館の歴史――『戦前期「外地」図書館資料集―北京編』解題」（前掲『戦前期「外地」図書館資料集―北京編』第一巻、三七四～三八四頁）ほか参照。

(58) 東方図書館は、東方文化事業総委員会北平人文科学研究所書庫。一九三五年八月三十日竣工。煉瓦と鉄筋による堅牢な三階建、総延一・八七六平方メートル余。書架は二階と三階、一階は参考陳列室などがあった。『支那学界大事記　昭和十・民国二十四年一月至八月』（北平人文科学研究所、一九三五年九月）巻頭に書庫の外観と内部の写真がある。

(59) 『毛稚黄十二種』は、毛先舒（一六二〇～八八）の著作集、康熙十二年刊。『北京人文科学研究所蔵書目録　昭和十一・民国二十五年十月末現在』（北京人文科学研究所、一九三八年。以下「『北京人文研目録』」と略称）叢書部三九丁上著録。本稿十一月二十日に収録書を列挙する。毛先舒は、字は稚黄、浙江省仁和の人。詩文をよくし、韻学に通じていた。

(60) 筆者の見た『宣和遺事』（『北平日記』一七〇頁注六一）は、『北京人文研目録』集部一一三丁上著録。

(61) 松井秀吉（？～一九三七）は、東京帝国大学支那文学科卒業の後輩（「北京旅行日記（一）」二〇五頁注五四）。八木香一郎は、『北平日記』三二頁注六四。真武直（一九〇六～九六）は、同書一九二頁注四一。東来順は、同書一〇八頁注三四。

(62) 大塚新、森誠男、坪川信三は、社団法人北京居留民会立北京尋常小学校の教諭（『北平日記』一四五頁注九八及び「北京居留民会経営小学校ニ関スル報告」（アジア歴史資料センター Ref.B04011711200、在外日本人学校教育関係雑件／学校調査関係 第二十三巻、一．在中華民国公使館、I北京〔I-1-5-0-1_16_023〕（外務省外交史料館））参照。社団法人北京居留民会日本倶楽部は、同書五〇頁注一八六。

(63) 北京同学会は、日本人創設の語学塾（『北平日記』一三五頁注三四）。常啓光は留学時代の中国語教師（『北平日記』三

三頁十月二十七日本文)。「北京同学会語学校教職員表(一九三七年六月末現在)」(那須清『北京同学会の回想』、不二出版、一九九五年、四〇頁)に「中国大学修業、二三歳、一九三五年四月着任、現住所西城按院胡同二三」とある。並んで筆者に『紅楼夢』を教えた奚待園の名も見え「五九歳、一九三〇年二月〜三五年五月在任、挙人・前清陸軍部員外部、安定門内五道営」と記す。

(64) 筆者が購入した卓従之『中州音韻』一巻は、北京大学刊、張漢重修石印本。于海晏『漢魏六朝韻譜』三冊(中華印書局、一九三六年)は、古代漢語音を考証した書。于海晏(一九〇二〜九九)は、のち安澜と改名。闕鐸『紅楼夢抉微』(大公報館、一九二五年)は、『北平日記』二三〇頁注八〇。『文献論叢』(国立北平故宮博物院十一週年紀念)』は、国立北平故宮博物院、一九三六年刊。

(65) 筆者は、留学を終え帰国する際、杭州に郁達夫(一八九六〜一九四五)を訪ね、魯迅への紹介状を書いてもらった(『北平日記』二三五頁注一〇六、三月十八日)。郁達夫は、本記述の翌日上海を出発している(胡金定「郁達夫年譜」、『言語と文化』第十巻、甲南大学国際言語文化センター、二〇〇六年、一八〇頁参照)。

(66) 論文は、陳垣「四庫提要中之周亮工」(前掲『文献論叢』三〜一二頁)。紀昀自筆の修正痕がある『四庫館精繕提要底本』(非完本)を入手し、この中で周亮工の名が全て塗り潰されたことを指摘し、改変前の原文を推定した。筆者はさきの留学時、周亮工『書影』を大学に購入している(『北平日記』一五〇頁注一一一)。

(67) 扶桑館は、東単大街にあった旅館(『北平日記』一四五頁注一〇〇)。森谷克己(一九〇四〜一九六四)は、「北京旅行日記(一)」一九七頁注一一。

(68) 繡房は、女性の部屋。墨盒は、墨汁を入れる壺(『北平日記』二六頁注一二)。

(69) 清華同学会(清華同学会総会)会所は、一九二七年東華門北東の騎河楼三九号に開設された(『清華大学志』、清華大学出版社、二〇〇一年、「第十節清華校友総会」九一〇頁参照)。

(70) 徳友堂は、『北平日記』一七〇頁注六二。周亮工『賴古堂文集』二十四巻は、道光九(一八二九)年序。

(71) 来薫閣は、馴染みの古書店(拙文「一九三〇年代の北京古書肆――目加田誠留学日記『北平日記』から辿る」、『中国文学論集』第四十三号、九州大学中国文学会、二〇一四年、二四六〜二四八頁参照)。『四庫全書弁正通俗文字』二巻(撰者未詳)は、四庫全書内の俗字について検証した書で、道光八年文盛堂重校刊本がある。王偁『東都事略』一百三十巻は、北宋九代の事跡を記したもの。宋星五・周藹如編『文淵楼叢書』(文瑞楼書局・直隷書局、一九二八年)は、四庫全

書未収録の五種（陳士珂『韓詩外伝疏証』十巻、夏燮『校漢書八表』八巻、趙紹祖『読書偶記』八巻、張雲璈『選学膠言』二十巻補遺一巻、許巽行『文選筆記』八巻）から成る。

(72) 華楽戯院は、前門外鮮魚口にあった劇場。尚小雲は、京劇四大名旦の一人。筆者は一九三四年六月二十八日に華楽戯院で尚小雲の「雷峯塔」を見て「実に美事なり」と感想を記す（『北平日記』一六〇頁注七・八）。

(73) 当時の隆福寺は、琉璃廠に次ぐ古書店街（『北平日記』三六頁注九八）。帯経堂（同書一六六頁注四一）、文奎堂（同書二八頁注三七）は、隆福寺街にあった古書店。

(74) 周在浚等輯『頼古堂尺牘三選』（周亮工『尺牘新鈔』十二巻、同『蔵弆集』十六巻、同『結隣集』十六巻）は、明末文人の書簡集。周亮工の鑑識眼に対する評価が高い（入矢義高「周亮工の尺牘集」、『東洋史研究』二二巻一号、東洋史研究会、一九六三年、五五～六六頁参照）。頼古堂は周氏の室名。葉小鸞『返生香』一巻は、『北平日記』五六頁注一一。

(75) 華賓園は、西四南大街にあった高級銭湯（『北平日記』二一〇頁注一二九）。

(76) 周作人（一八八五～一九六七）は、魯迅の弟で北京大学教授（『北平日記』一八三頁注一四一）。趙蔭棠（一八九三～一九七〇）は、字は憩之、河南省鞏県の人。北京大学などで音韻学を教えていた。同月二十日に訪問、面会する（前掲『中国文化界人物総鑑』六五二頁参照）。周豊一（一九一二～一九九七）は周作人の長男（同書一五五頁注一六〇）。周作人『風雨談』（北新書局、一九三六年十月）は大野城心のふるさと館蔵。

(77) 同和居は、西四牌楼にあった山東料理店で、銭稲孫が贔屓にしていた（『北平日記』一五二頁注一三五）。

(78) 北平大学法商学院は、一九三四年、法学院と商学院を合併して北京城内東南部に創設された。寸樹声（一八九六～一九七八）は、字雨洲、雲南省騰衝の人、一九三二年九州帝国大学卒業（経済学士）、一九三四年より同学院副教授兼研究室事務主任兼秘書室弁事。戦後は、雲南大学副校長、中国民主同盟中央委員などを歴任した（『民国二十三年度国立北平大学法商学院一覧』、国立北平大学法商学院、一九三五年ほか参照）。寸樹声について山室三良の回想がある（「春椿――中国の思い出」、『生かされて九十年』、石風社、一九九五年、一二～一六頁）。

(79) 飛仙戯院（飛仙電影院）は、東城灯市口にあった映画館。一九三六年当時、毎月国内映画二本、外国映画六本を上映していた（李微「娯楽場所与市民生活――以近代北京電影院為主要考察対象」、『北京社会科学』二〇〇五年第四期、五五～六一頁参照）。

(80) 一九三六年十月三十一日、蔣介石五十回目の誕生祝賀行事が南京で行われ、各地より軍用機六十余機が献納され、う

ち二十四機が記念飛行した（「空陸お祭り騒ぎ――南京の蔣氏誕生祝賀」、『朝日新聞』一九三六年十一月一日朝刊二頁参照）。童子軍（ボーイスカウト）は、民国初期に伝来し、一九二六年中国国民党直轄となった。この大会で蔣介石は中国童児軍総会会長として主検閲官をつとめた（許海涵「回憶童子軍生涯」、『世紀』二〇一六年四期、世紀雑誌社、三八～四〇頁参照）。筆者の見た映画は「生死同心」（応雲衛監督、袁牧之主演、明星影片公司、一九三六年）と思われる。

(81) 『校礼堂全集』は、凌廷堪（一七五七～一八〇九、字次仲、安徽省歙県の人）の著作集。『校礼堂文集』三十六巻、『校礼堂詩集』十四巻、『燕楽考原』六巻、『梅辺吹笛譜』二巻補録一巻、『晋泰始笛律匡謬』一巻、『元遺山先生年譜』二巻、張其錦『淩次仲先生年譜』四巻から成る嘉慶道光年間の刊本。『陳本礼四種』は、『屈辞精義』六巻、『急就探奇』一巻、『協律鉤元』四巻、『漢詩統箋』一巻か。陳本礼（一七三九～一八一八）は、字嘉恵、江蘇省揚州の人。趙宧光『説文長箋』一百巻は、崇禎四（一六三一）年序。撰者の趙宧光（一五五九～一六二五）は、字水臣、江蘇省大倉の人で、北宋太宗の第八子趙元儼の末裔。

(82) 竹田四郎夫妻は『北平日記』八六頁注三四。

(83) 五昌は、兌換所（『北平日記』一三四頁注二八）。潤明楼は、東安市場内の料理店（同書四三頁注一四四）。

(84) 『国防文学論戦』（新潮出版社、一九三六年）は、国防に関する魯迅、郭沫若、茅盾らの論文五十篇及び「中国文藝家協会宣言」、「中国文藝工作者宣言」、「文藝界人為団結禦侮与言論自由宣言」を収録。

(85) 『続修四庫全書提要』編纂は、東方文化事業総委員会北平人文科学研究所で続けられていた（経緯は『北平日記』八三頁注二五）。

(86) 王雲五主持『続修四庫全書提要』（台湾商務印書館、一九七二年。筆写部分は本書と対照、以下『続修提要』と略称）掲載箇所は以下のとおり。【十一月十七日】『説文古語攷』（経部小学類説文之属、一七〇四頁）、『説文経典字釈』（経部小学類説文之属、一六五七頁）、『説文通訓定声補遺』（経部小学類説文之属、一六六三頁）、『魯詩故』（経部詩類三家詩之属、五五六頁）、『斉詩伝』（経部詩類三家詩之属、五五二頁）、『韓詩故』（経部詩類三家詩之属、五六一頁）、『説文理董後編』（経部小学類説文之属、一六三九頁）、『説文徐氏新補新附攷証』（経部小学類説文之属、一六四四頁）、『詩経音韻図』（経部詩類三家詩之属、四四六頁）、『薛君韓詩章句』（経部詩類三家詩之属、五六六頁）、『説文双声』・『説文畳韻』（経部小学類説文之属、一六八一頁）、『読書劄記』（『古桐書屋続刻三種』＝子部自著類、九五五頁）、『四音定切』（経部小学類韻書之属、一八六九頁）、『古韻大指』（経部小学類韻書之属、一八七〇頁）、『四声均和表』（経部小学類韻書之属、

一八六〇頁）、『顔氏家訓校記』（子部雑家類雑学之属、一五八二頁）、『顔氏家訓注』（子部雑家類雑学之属、一五八〇頁）、『顔氏家訓補注』（子部雑家類雑学之属、一五八一頁）、『説文読若攷』（経部小学類説文之属、一七一〇頁）、『読画録』（子部藝術類書画之属、一三〇一頁）、『書影』（子部雑家類雑説之属、一六三〇頁）、『遠志斎詞衷』（集部詞曲類詞話之属、七八二頁）、『経義知新記』（経部五経総義類、一〇一六頁）、『韓詩外伝校注』（経部詩類三家詩之属、五六四頁）。【十一月十八日】『疎香閣遺録』（史部伝記類雑録之類、八六八頁）、『天寥年譜』（史部伝記類名人之類、六五七頁）、『午夢堂全集』（集部別集類、一八八頁）、『田間文集』（集部別集類、二三〇頁）、『田間詩集』（集部別集類、二三一頁）、『雨村詞話』（集部詞曲類詞話之属、七八六頁）、『楽府余論』（集部詞曲類詞話之属、七九〇頁）、『選巷叢談』（子部雑家類雑説之属、一六七〇頁）、『賴古堂蔵書甲集』（子部雑叢類、九三頁）、『韓詩外伝校注（安徽叢書第一期）』（子部郡邑類、七五五頁）、『校礼堂詩集（安徽叢書第四期）』・『校礼堂文集（同）』（子部郡邑類、七五八頁）、『尺牘新鈔（海山仙館叢書）』（子部雑叢類、三三二頁）、『風雨楼叢書』（子部雑叢類、六二四・六二五頁）、『晨風閣叢書』（子部雑叢類、五六七頁）、『函海』（子部雑叢類、一八九・一九〇頁）。

(87) 新陸春は、西長安街にあった南方料理の老舗（『北平日記』一三八頁注五三）。

(88) 『続修提要』は「龕」字無し。

(89) 厚徳福は、前門にあった河南料理の名店（『北平日記』一七二頁注七九）。

(90) 家彝は、男性の使用人（『北平日記』一〇八頁注三六）。五龍亭は、北海公園内の建物（同書一〇三頁注八）。

(91) 葉恭綽（一八八一～一九六八）は、字は誉虎、広東省番禺の人。京師大学堂で学び、中華民国財政部長、交通大学初代総長などを歴任し、中国営造学社創設に関わった。一九三五年「菉斐軒所刊詞林要釈跋」（『詞学季刊』第二巻第三号、民智書局）にて宋本『詞林韻釈』を発見したと発表した。前掲『中国文化界人物総鑑』六一八頁ほか参照。

(92) 徐乃昌（一八六二～一九四三）は、字は積余、号は随庵、安徽省南陵の人。蔵書家として知られ、『随庵叢書』（宋本『詞林韻釈』〔別称『菉斐軒詞林要韻』〕を収録）、『積学斎叢書』、『安徽叢書』（黄質と共同）などを刊行した。前掲『中国文化界人物総鑑』三四〇頁ほか参照。

(93) 趙蔭棠は、韻書の成立史を考証し、『中原音韻研究』（北京大学出版、一九三二年）を公刊、『中原音韻』は『中州音韻』より早く成立したこと、『詞林韻釈』は宋本とされてきたが、明の寧献王朱権『瓊林雅韻』と対照の結果、明代成化頃の書と推定されることなどを指摘した。小川環樹「趙蔭棠氏の『中原音韻研究』を読みて」（『支那学』九巻一号、弘

文堂書房、一九三七年七月、一四九～一六八頁）参照。大野城心のふるさと館に『中原音韻研究』（商務印書館、一九三六年）がある。

（94）前掲『北京人文研目録』経部六六丁下著録、周徳清撰、王文璧増注、九思堂刊本。封面は漢籍データベース京都大学人文科学研究所蔵書、本文は慶應義塾大学メディアセンターデジタルコレクションを参照（URL：http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/kanseki?record=data/FA019705/tagged/0061006.dat&back=1、https://dcollections.lib.keio.ac.jp/ja/kanseki/80-59-2-1、最終確認日＝二〇二一年十月二十日）。

（95）以下の部分は筆録しない。

（96）『北京人文研目録』経部六六丁下著録。

（97）『北京人文研目録』叢書部十九丁上著録。冀勤輯校『午夢堂集』上中下三冊（中華書局、二〇一五年）参照。

（98）『北京人文研目録』叢書部三九丁上著録（『毛稚黄十二種』）。

（99）吉祥戯院は、東安市場にあった劇場（『北平日記』五七頁注一七）。楊小楼（一八七八～一九三八、同書九七頁注七八）、赫寿臣（一八八六～一九六一、同書一五一頁注一二七）は、京劇の名優。「連環套」は、清代の公案小説『施公案』に取材した人気演目。連環套主人の山賊竇爾墩（赫寿臣）と侠客の黄天覇（楊小楼）との確執と友情を描く（中里見敬・松浦恆雄編『濱文庫戯単図録――中国芝居番付コレクション』、花書院、二〇二一年、一四四頁参照）。

【前稿訂正】

「目加田誠『北京旅行日記（一九三六年）』翻刻注（一）」に誤字がありました。お詫びして訂正いたします。

一九二頁　左より五行目　（誤）『返志堂集』　→　（正）『通志堂集』

※本研究は、JSPS 科研費 JP20K12947の助成を受けたものです。